

審査経緯

新体制となって二年目となる本年度の北海道建築賞委員会は、第1回の委員会を4月28日に開催し、表彰規程や審査日程を確認した上で、応募作品に対する審査方法について審議した。続いて、この時点での応募作品はまだなかったが、「北海道建築作品発表会作品集2015」等の情報をもとに、今年度の審査対象になり得るような注目すべき作品について議論した。ここで挙げた作品の中から、委員会からの応募推薦対象作品として5作品を選定し、各設計者に応募についての検討を依頼することとした。

応募締切を経て開催された第2回委員会（5月23日開催）では、作品審査に関わる学会倫理規定と具体的な審査方法を確認した上で、応募推薦対象作品の中から実際に応募された4作品を含む以下の計14作品を、今年度の審査対象とした。

応募作品および設計者（応募順）

- ①下川町のトドマツオフィス（内海彩君、佐藤孝浩君/（株）KUS 一級建築士事務所、桜設計集団）
- ②函館アリーナ（井上久誉君、江頭恵一君、中村光邦君、北原和俊君、塚田俊君/（株）大建設、（有）ティーアンドパルス）
- ③日本基督教団 真駒内教会（菊池規雄君/（株）アトリエブク）
- ④明治安田生命札幌大通ビル（雨宮正弥君、奥村彰浩君/（株）日本設計）
- ⑤みそぎの郷きこない（伊達昌広君、瀬尾寛美君/（有）伊達計画所、（株）高岡建築設計事務所）
- ⑥室蘭の歯科（桐圭祐君/KIRI）
- ⑦丘のまち交流館“bi.yell”（小澤丈夫君、宮城島崇人君、菊池規雄君、榊田洋子君、山脇克彦君/北海道大学大学院、宮城島崇人建築設計事務所、ワンダーアーキ建築設計事務所、桃季舎、山脇克彦建築構造設計）
- ⑧北菓楼札幌本館（西田達生君、横尾淳一君、安藤忠雄君/（株）竹中工務店北海道支店、安藤忠雄建築研究所）
- ⑨036（臼井巧君/OFFICE FOR DESIGN）
- ⑩北光の家（杉山友和君/一級建築士事務所アーカイヴ）
- ⑪新得町都市農村交流施設 カリンパニ（川人洋志君、斉藤雅也君/川人建築設計事務所、札幌市立大学）
- ⑫サービス付き高齢者向け住宅「あやとり」（三浦友己君、團塚紀祐君/大成建設（株）一級建築士事務所）

⑬西野の家（高木貴間君/高木貴間建築設計事務所）

⑭ときわの家（鈴木理君/（株）鈴木理アトリエ一級建築士事務所）

これらの応募作品に対し、今年度の北海道建築賞においても継続して「先進性」「規範性」「洗練度」の3項目を基本的な評価軸とすることを確認した上で、第一次審査として応募書類による現地審査対象の選考を行った。各委員が個別評価を述べた後に、各作品について活発な議論が為され、現地審査対象作品として、③「日本基督教団 真駒内教会」、⑥「室蘭の歯科」、⑦「丘のまち交流館 “bi. yell”」、⑧「北菓楼札幌本館」、⑨「036」、⑩「新得町都市農村交流施設 カリンパニ」、⑬「西野の家」、⑭「ときわの家」の8作品を選定した。

現地審査は、7名の委員全員出席のもと、7月9日に⑦⑨⑩、7月30日に③⑬⑭、8月20日に⑥⑧の日程で行った。現地においては、設計者本人からの説明に加えて、質疑を通じてそれぞれの建築の詳細を把握することができた。

第3回の委員会（9月1日開催）では、現地審査を行った8作品を対象として、最終選考を行った。選考方法を再度確認した上で、まず各委員が8作品それぞれについての評価を述べるとともに、次の段階の議論へと進めたい作品を挙げた。この時点で高い評価を得られなかった⑦「丘のまち交流館 “bi. yell”」、⑬「西野の家」については、賞の対象から外すこととした。残りの6作品については、個別に多くの観点から検討がなされ、賞の決定に至るまでの議論は長時間に及んだ。最終的に北海道建築賞に⑩「新得町都市農村交流施設 カリンパニ」、北海道建築奨励賞に③「日本基督教団 真駒内教会」および⑭「ときわの家」とすることを、委員全員の同意のもとで決定した。

「新得町都市農村交流施設 カリンパニ」は、農場において内外の様々な交流を促す場を、シンプルながらも密度の高いデザインで実現したものである。長閑な農場の風景の中にあって、白い頬杖が整然と鋭く立ち並ぶその佇まいからは、一見して凜とした場の気配を感じ取ることができる。全床面積の半分をも占める“縁”の空間は、内外をつなぐ“縁”であると同時に主たる空間であるともいえる。またここは自然の繊細な移ろいを映し出す場であるとともに、季節によるモードの切り替えが温熱的な検討も加えて肌理細かくデザインされている。北海道において半外部的な空間は、これまでも多くの優れた試みが為されてきたといえるが、何よりもこれほどまでに一貫した美学において提示された前例はなかったであろう。以上のことから、本賞に値する優れた成果であると認め設計における統括責任者を北海道建築賞とするものである。

「日本基督教団 真駒内教会」は、光によって彩られた聖堂の美しさが際立つ建築である。小振りな聖堂の大きさに対して、アンバランスなまでに彫りが深くエッジの効いた枱形格子を通して、繊細に異なる光が上部から降り注いでくる。その光を導くための造形が、外部

の形態へとそのまま印象的に現れてくることも、この建築を力強いものになっている。四方の壁面をわずかに内側に傾斜させるなど、作者の明確な意図によって細部に至るまで神経の行き届いた設計が為されている。審査においては、聖堂と回廊などその他の部分との関係性に対する物足りなさの指摘もあったが、施主側と長い時間をかけて入念な検討が為されたことが伺えること等も含め、全体的な完成度の高さを認めることができる。

「ときわの家」は、作者自らの住居とアトリエに加えて父親の週末住宅や彫刻家のアトリエを内包するなど、一般的な多世帯住居とは異なる特異なプログラムを持つ建築である。そのプログラムを、2×4 間を基本とするユニットとそれらのズレによって互いの適度な距離感を生みつつ巧みに解いている。さらに収納や水廻りを収めた小さなユニットをふたつ加えることで、国道側からの視線を遮りつつ、ユニットの隙間に単純ではない豊かな空間を創り出すことに成功している。決して新規性を問うような建築でないものの、素材やレベル差の吟味なども含めて、身体に沿うような水準で丁寧に設計された佳品である。

現地審査を経て、残念ながら選外となった5作品についても以下の通り総評を簡潔に述べる。

「室蘭の歯科」は、家型のフレームを等間隔で並べるという明快な形式において、土地との関係や歯科というプログラムに対する新たな提案をしている。都市的スケールでの論理と歯科という機能的な論理を、このひとつの形式で関係づけようとすることは興味深いものである。一方で、直裁的に形式を表現しようとする‘わかりやすさ’の反面、それが逆に、まず形式ありきのある種の‘堅さ’につながっているようにも思われた。

「丘のまち交流館“bi.yell”」は、既存の商業施設を多機能のコミュニティ施設へとリノベーションするというそれ自体困難なプログラムにおいて、軟石の調査や町との様々な折衝など、長期に渡り広範な角度から粘り強く検討を重ねた力作である。設計+監理という従来の建築家の職能の枠組みを超えて行動すること自体が、ここでの大きな提案であるともいえるが、語られた論理と操作を建築空間そのものの魅力として感じ取ることは少々難しいように思われた。

「北菓楼札幌本館」は、もともと道の図書館だった建物を、民間企業と設計者による事業プロポーザルを経て改修し実現した労作である。古い様式建築などを表層だけ残して背後に高層建築を建てるような従来からある手法とは異なり、構造的な補強をすることで既存煉瓦壁を構造的・空間的に自立したものとしている。床スラブからも自由になった煉瓦壁によって、このような貴重な建築物の保存・改修に対して、多くの可能性を広げる提案となっていると思われる。様々な困難をクリアした大変な労力を含め、この優れた技術的提案には高い評価が為された。しかし、主に上層階の内部空間は魅力的であるものの、そこには技術的提案とのつながりが希薄であり、単なる‘インテリア’となっているように感じられ

たことが悔やまれる。最後までどのように位置付けて評価するかの議論がなされたが、本賞に該当する総合的な意匠的観点から判断して、賞の対象として見送ることとした。

「036」は、重度の障害を持つ子供とその家族のための住宅である。言葉がよく理解できない子供のために、日常生活において世界観を形成する手助けとなる‘座標’のようなものを空間的に創り出そうとしている。そのために、無柱の大きなひとつの内部空間と外部の庭空間において、二次的に空間を分節する要素が操作的に用いられている。細部までの興味深いこだわりが見られるが、建築家の詩的かつ私的なイメージを超えて、これが本当に子供と家族にとって魅力的な空間となりえているかについては疑問が残った。

「西野の家」は、北海道における半外部空間のあり方を、構成的な側面からより積極的に提案しようとするものである。変形し傾斜した狭小敷地において、諸空間をコンパクトにまとめ上げた構成力に、作者の確かな力量をみることができる。しかしながら、半外部空間は、特に北海道においては温熱的な側面においても検討を加えないと、有効な場となり得ないと思われる。この半外部空間のために、その他諸室が逆に窮屈に感じられることも気になる点であった。

(文責：山田深)

北海道建築賞「カリンパニ」

国道から外れ、美しい並木道に沿って日高山脈に向かうと共働学舎新得農場が見えてくる。ここは、心身に妨げを抱えているなど様々な事情により、社会から距離を置いて生活を送らざるを得なくなった方々が共に暮らしながら、農業や酪農を通じて、社会とのつながりを生み出す活動をしている農場である。特にここでつくられたチーズは全国区の人気品で、世界的な評価も高く、その技術を学ぼうと、国内だけでなく海外からもここを訪れる人々が増えている。こうした状況から「カリンパニ」には農場の人々だけでなく、チーズ作り体験や、料理教室といった地域に開かれた催し、そして十勝地方の福祉、農業ツーリズム、酪農に関わる会議や研修を行う集いの場としての機能が求められた。

作者が持つ繊細かつ鋭い感受性によって、敷地とその周辺に隠された諧調的コンテクストを明示し、農場内の起伏や他施設との関係を思慮したうえで、注意深く配置が決定されている。建物は、大きな縁側を形づくる片持ちスラブと、それを覆うのびやかなフラットルーフが成す水平ラインが印象的であり、山々や梢とのコントラストが美しい。深い庇を支える柱と、薄く軽やかな軒先を実現するための斜材は縁側をリズムカルに取り囲み、外観はさながら木工芸品を思わせる。正方形に近いスクエアな大屋根の下に、機能・設備・構造を合理的に担う複数のボックスが慎重に配置され、その間に、様々なアクティビティに対応できるフレキシブルな場が立ち現れている。縁側に対して大型の木製引戸を開閉すること、更には縁側の外周に農業用メッシュなどを張ることにより、季節やイベントに応じた活動領域の変容と選択が可能となっている。こうした空間につくられる工学的検証を経た意図的な温度ムラは、新たなアクティビティを誘発し、施設運用の可能性を広げ、今後の農場の活動展開に大きく貢献するだろう。この諧調的空間を構成するすべてのエレメントは、その形状、質、色、艶などにおいて、作者による深い吟味がなされており、それらが相俟って、光や風、僅かな起伏、木々の色づきなど、日々の生活においては見過ごしてしまいそうな自然のざわめきを捉え、顕在化し、まさに作者が目指した「楽器のような建築」を形づくっていると云えるだろう。

ともすれば「北海道の原風景」という言葉で括られがちな、牧歌的表情を持つ建築が並ぶことも考えられる今回の敷地において、作者はクライアントの求めを満たしつつ、丁寧に敷地を読み解き、フラットな屋根の内外に、周辺の自然を凝縮した森のような場を提示した。それは様々な現象を内包し、人の動きや意識の変化に大きな振幅を持って寄り添い、自在に姿を変えうる「動く」空間である。理論とデザインが先鋭化し、体験が伴わない建築が少なくない昨今、独自の美学と環境工学的検証とに裏付けされた、体験できる「北の建築の新たな類型」のひとつを示した功績は大きい。

(文責：赤坂真一郎)

日本基督教団真駒内教会

札幌の緑豊かな住宅地に建つプロテスタント教会の建て替えである。外観はのこぎり屋根に特徴があり、敷地内にある同教団の幼稚園の庇に合わせた教会のアプローチ庇の高さが関連性を成している。この教会は回廊により、礼拝堂を取り囲んだ空間構成の建築である。

中心にある礼拝堂に入り、天を仰ぐと数十の光井戸から降り注ぐ光に目を奪われる。陽光による微妙な色の構成体となって現れている。東西に向けられたトップライトは昼から夕刻にあって、天空の青白の空色と同時に西の空からの淡い黄の光を受ける。光は微妙に角度をもつ光井戸を通過するうちに、繊細な色となって礼拝堂に降り注ぐ。トップライトの形状は、構造材と雪を切る鋭角の屋根断面のディテール検討が入念におこなわれた結果であり、同時に多様な光を創出し、ダイナミックかつ神秘的な礼拝の空間をつくっている。またこの礼拝堂は、音楽の場とも捉えており、深い光井戸のトップライトや木質の縦ボーダー壁が反響や残響の調整をしている。

回廊のあるこの教会は、ルイス・カーンのフォーム・ダイアグラムで有名なファースト・ユニタリアン教会とプランが重なる。牧師が信者の質問を受け、周りの人々に話しかける回廊の場は、礼拝堂の中までは入ろうとしない手前の領域である。そして牧師や信者たちのコミュニケーションの場となる。真駒内教会も回廊をもち、エントランス、厨房、窓側に沿って長くテーブルが置かれ、バザーや絵の展覧会など活動的に使われており、人が集まり交流する場となっている。一方、祭壇領域を光の象徴空間とした教会建築は多く見られるが、この真駒内教会では、全面光井戸の天井からの天の光をすべての信者の席に平等に与えた聖域を創っている。

この教会は指名プロポーザルでアトリエブункが選ばれ、主たる設計者として菊池規雄が手がけている。菊池がこれまでに単独で設計したものの中には、回廊形式の印象深い作品が幾つか見られる。例えば、「八王子みなみ野の家」は半地下の音楽スタジオを中庭に埋め、過密な住宅地での防音と中庭上部からの採光を得て、場所の読み取りと使う者の切実な想いを結実させてきた。住宅地にあり、幼稚園と隣接するこの真駒内教会は、回廊が木製カーテンウォールの透明性の外壁によって外そして社会に開いている。教団の心や思いを汲んだ設計であり、礼拝堂にあっては、すべての信者の席に光を平等に与えようとした祈りの場の解釈と空間創出にオリジナリティがあり、優れた作品として評価する。

(文責：佐藤 孝)

第 41 回 (2016 年度) 北海道建築奨励賞

株式会社鈴木理アトリエ一級建築士事務所
鈴木 理君

作品名 - 「ときわの家」

丹念に設計された建物である。真駒内川の沢と支笏湖に向かう国道に挟まれた手強い地形を読み、居住者の暮らしを読み、どこをとっても設計者の気配りが行き届いた優しい住宅となっている。建物の造形や敷地計画、室内の平面計画や大きさ、窓の大きさや角度、開き方までも、居住者の暮らしを考え抜いている。

支笏湖に向かい芸術の森を抜けたところに、木縦張り外装の古い納屋のような建物が木立の中に肩寄せ合って建っている。それは緑の中のシーランチのようにも見える。また隙間の屋根の緑は、一見盛り上がった地面のようでもあり、周囲の緑と同化している。外部との調和を徹底して考えている作品として、終わっていないアプローチの始末を見てみたかった。

柔らかな外観がそのまま内部空間にも繋がり、小ぶりの内部空間を持つ幾つかの建物は、隙間の空間を窓の配置によって室内空間づくりに巧みに使っている。敷地条件を生かして、沢の緑を取り入れることにも余念がない。沢の緑に向かって大きなガラス面で開放されていても、十分に守られた居心地の良い空間を提供している。細部にまで設計に手を掛けていることが覗える。一枚ガラスで構成された絶妙な斜め屋根の角度と方向がそれを物語っている。施主自らの居住空間とアトリエ、そして、テンポラリーな二人の同居人という、不思議な条件を巧みに仕切り、繋げ、小さな空間の集合ながら、開放性も獲得している。

全てが丁度よい、という印象を受ける。これは建築的にどんな意味を持つかは難しいところだが、住まう側にとっては、この上ないことである。これまで蓄積してきた建築家としての設計力が、余すところなく発揮されているのだろう。

設計の力量は、意匠設計だけではない。北海道の建築家たちが獲得してきた高い住宅建築技術、その最先端をさりげなく、当たり前のように取入れ、その上で美しく見えるディテールを独自に工夫している。その技術設計力の高さも評価すべきである。

自邸の設計から始まった独創的なデザインアイデアが、新たなクライアントの設計に加わる時、そこにどんな建築が生まれてくるのか、期待が膨らんだ。

(文責：福島 明)